長砂 實・芦田文夫編

『ソ連社会主義論』

——現状と課題——

大月書店 1981.3 317ページ

現在のソ連社会体制をどのように評価すべきかについては、周知の通り意見の大きく分かれるところである。現存ソ連社会体制は、「国家資本主義」であるという見解と、それは「発達した社会主義」であるという見解とを両極として、「革命後社会」、「前期的社会主義」、「胎児的社会主義」などの様々な中間的諸見解が主張されている。本書の意図は、このソ連社会体制評価の問題に対して、ソ連社会の「現状分析」を通じて、解答を与えることにあるようである。著者の言葉を借りれば、「本書はソ連社会主義の現状分析を意図したものである」(同書3頁)。

本書は、10名からなる研究者グループの共同研究の成果であるが、この課題に対する著者の接近方法の特徴は、「対立物の統一」的アスペクトからの総合的なアプローチにあるとされている。より具体的にいえば第1

に、「ソ連社会主義の発展を、社会主義の一国的発展と世界的発展との統一においてとらえる」(4頁)こと、第2に「ソ連社会主義を、特殊性と一般性との統一においてとらえる」(5頁)こと、すなわち「ソ連社会主義は社会主義の一般的な基本的諸特徴を実現している」(同)ことを看過してはならないということ、第3に、「ソ連社会主義を後進性と先進性との統一においてとらえる」(同)こと、第4に、「ソ連社会主義は、消極性(欠陥、誤り)と積極性(長所、功績)との統一においてとらえられねばならない」(5~6頁)こと、最後に「ソ連社会主義を、生産力と生産関係、土台と上部構造の相互関係にかんする史的唯物論の諸命題にしたがってとらえねばならない」し、「とりわけ、政治と経済との統一の観点からの分析が必要である」(6頁)こと、以上の5点がそれである。

これは、本書の課題に対する接近方法の特徴点として、著者グループによって列挙されているものであるが、これ以外の接近方法上の特徴として、ソ連社会の研究を経済のみに限定せず、「ソ連社会主義のトータルな把握」(6頁)を共同研究によって推進しようとする方法態度を指摘することができる。このことは本書の構成を一瞥すれば明らかである。紙巾の都合上、各章の表題だけを紹介することにすると、第1章—生産の社会化と社会主義的所有、第2章—生産発展水準と経済効率、第3章—経済管理と計画化方式、第4章—労働の普遍性と就業・労働条件、第5章—経営間協業と農工統合、第6章—貿易と産業協力、第7章—生活水準と生活様式、第8章—階級・階層と「官僚制」となっている。

そして、各章において「ソ連社会主義の現状分析」をおこなった結果として、著者グループが「ほぼ共通して持っている結論は」(6頁)、「ソ連はすでに資本主義社会から共産主義社会への過渡期を終えて共産主義社会の第一段階としての社会主義ではあるが、後進性の諸要素をなお強く残した成熟・発達しつつある社会主義、いいかえれば、成熟・発達した社会主義にいまようやくさしかかろうとしている社会主義である」(8頁)という点にある。この結論に示されるように、ソ連社会体制は社会主義であるという本質規定にとどまらず、ソ連社会体制の社会主義としての成熟度の判定までも行われていることが本書の際立った特色をなしている。

だが本書を通読して得た私の感想は、この結論の論証は不十分であり、説得的ではないということである。その第1の理由は、「ソ連社会主義」が「成熟・発達した社会主義にいまようやくさしかかろうとしている社会主義」であるということを論証するためには、少なくとも著者

の構想する「発達した社会主義」の理論モデルと、成熟度を評価する判定規準とが明示される必要があるにもかかわらず、それらが曖昧模糊としているという点にある。著者の規定する「発達した社会主義」とは、資本主義にたいして社会主義が有している本来的な優位性を、現存する資本主義との対比において議論の余地のないほど明白に示すことのできた社会主義のことだと解釈することが許されよう(7頁)。仮にこのような「成熟・発達した社会主義」観に従うとするならば、「ソ連社会主義」が「成熟・発達した社会主義にいまようやくさしかかろうとしている社会主義である」ことを論証するためには、「資本主義にたいして社会主義が有している本来的優位性」とは具体的にどのような特性のことであるのかということと、現代の諸条件のもとでそれらを実現する可能性があるとということとを明示する必要がある。だがそのさいの明示の仕方は、社会主義の理念的諸特性の羅列型モデルの提示であってはならないであろう。何故ならば、それは外見上の魅力とは反対に、実質的内容は空虚なユートピアにとどまる可能性があるからである。というのは、社会主義的所有・民主主義・中央計画経済・効率・平等・生活安定・内発的技術革新能力等々の諸特性間には、肯定的・積極的相互連関ばかりでなく、否定的・消極的相互連関も存在しており、後者の役割は無視しうるほど小さいと一概に言うことはできないからである。従って著者は、両側面を考慮したうえで、社会主義の理念的諸特性を具現した諸サブシステムから整合的に合成される全体システムの一定のモデルが構築可能なことを示す必要があろう。もしもこれがない場合には、システムとしての「成熟・発達した社会主義」の成立可能性の理論的判定規準を欠くことになるから、「成熟・発達した社会主義」と「ソ連社会主義」との距離を測定して、その成熟度を評価することには無理が生じる。それは、比喩的にいえば、目的地が定まらないのに、現在地点から目的地までの距離を測定しようとするようなものだからである。それでは、著者は、「成熟・発達した社会主義」の全体システムの構築可能性を明示しているであろうか。私が本書を通読した限りでは、この問題についての論述は殆どないから、それが明示されているとは思われない。しかしそれが明示されていないということそれ自体は、批判の対象とはなり得ないであろう。というのはそのようなモデルを提示することは、現在の理論状況において決して容易ではないと、私には思われるからである。しかしもしそうだとすれば、「成熟・発達した社会主義」との関連において、「ソ連社会主義の現状分析」を行っ

て、その成熟度を判定するという課題設定自体が、所詮無理なことであって、時代錯誤ではないのかという疑問が生じるのである。これが、本書の結論が必ずしも説得的でない理由の第1である。

第2の理由は、序文中の結論と本文中に展開されている命題との整合性の問題である。社会主義の理念的特性羅列型モデルは、ソ連社会が社会主義的属性を有するか否かを判定しようとする場合に、一定の有効性を持つことができる。社会主義の理念的諸属性に関して、必要な情報が入手できれば、それらをソ連社会がどの程度実現しているのか、大まかな判断を下すことは可能だからである。だがその場合、各々の理念的属性の実現度は一律ではないかも知れない。例えば、第2章では、社会主義的民主主義の実現においてソ連はまだきわめて未成熟な段階にあることが明言されているのに対して(71頁)、第4章ではソ連が「社会主義に固有な完全就業」を実現した点が強調されている(138頁)。このように、本書各章の分析を通じて明らかにされた社会主義的特性の実現度が異なるとすれば、それらを総合して全体をどう評価するのかという、科学的手続きが必要不可欠になるはずである。ところが本書ではこの手続きが欠落しているため、前文において示された結論「成熟・発達した社会主義にいまようやくさしかかろうとしている社会主義」(8頁)という命題と、たとえば第2章の指摘「企業経営から国民経済管理にいたる各段階での実質的な勤労者主権の確立、社会生活のあらゆる側面や国際社会の動向にかんする全面的な情報の流通、政治的・思想的自由の文字どおりの保障等をふくむ社会主義的民主主義の実現において、ソ連がまだきわめて未成熟な段階にある」(71頁)という主張とは、どのように整合的に理解したらよいのか不明であるし、また後者の主張に含まれている「企業経営から国民経済管理にいたる各段階での実質的な勤労者主権の確立」が「まだきわめて未成熟な段階にある」という主張や、第3章における、「生産協議会」という形態の勤労者の企業管理参加が「広がり」と深さの点で初期的水準にある」(116頁)という主張から論理必然的に導出されると思われる1つの命題、すなわち社会主義的所有の発展水準は「まだきわめて未成熟」で「初期的水準」にあるという命題と、序文中の件の結論とは、どのように整合的に理解したらよいのか、読者は当惑せざるをえないのである。

第3は、「ソ連社会主義の現状分析」の視点設定問題である。ソ連社会の社会主義的性格の実現度を測定することを目的として、現状分析を行うためには、分析視点

が具体的に明確に設定される必要がある。ところがこれが不分明な箇所があるのである。例えば第1章では社会主義的所有が論じられているが、そこではそれは労働者の直接的な社会的所有のことであり、マルクス主義古典において与えられている抽象的規定にとどまっている。第1章の執筆者は、それを「直接的な結合」と「社会的統合」との2契機に分割し、両者の関係を「生産の社会化」との関連において分析することを試みている。しかしここでは、「ソ連社会主義」において「国家的所有」すなわち国家の媒介のもとで、労働者が全社会的規模で直接に生産手段を所有することが果して可能であるのか、あるいはこの媒介が存在してもなお労働者の「直接的結合」が社会的統合のもとで可能であるとしたら、それはどのような具体的社会関係として構想しうるので、そして執筆者としては可能なバリエーションのいずれを選択して、現状分析のさいの判定規準として設定するのか、これらの点が不分明なのである。だがこの点を具体化しなければ、社会主義的所有についてのソ連の現状を確定することも、この現状と生産の社会化との関連を明確にすることも不可能であろう。例えば30年代ソ連における「生産の社会化」と「社会主義的所有」との関係の特徴づけた次の文章が、私には意味不明であるのも、このような具体化の手続きが欠如しているからではないかと思われる。すなわち「生産の社会化と社会主義的所有・管理構造との相互関係におけるソ連の初発の特徴は、なによりも、国家権力を楨杆とする労働者階級による生産手段の掌握、それらの『直接的な結合』という枠組の確立のもとで、それらの『社会的統合』が国家による集権的な計画・管理方式によって、上からの強力的な社会的分業構造の変革、上からの強力的な生産の社会化の遂行にもとづいておこなわれようとしたところにある、といえるであろう」(27頁)というのがそれである。私にとってこれが意味不明だというのは、第8章に示されるように、30年代には政治的・経済的特権をもった「ソビエト官僚制」が労働者階級と生産手段との間に介在するという枠組が確立されたにもかかわらず、『直接的結合』という枠組の確立」と言われているからであり、執筆者は両枠組の間に矛盾がないと考えておられるのか、矛盾があるとみなしている故に、文中末尾で「おこなわれようとしたところにある…」とのべて「おこなわれようとしたが、おこなわれなかった」と主張されたいのか、明確に理解できないのである。さらに第8章によって、「ソビエト官僚制」は現在なお存続していることが明らかである以上、社会主義的所有概念に「社会的統合」との統一における

「直接的結合」の契機を導入した場合、社会主義的所有はソ連において現在未成立だということになるのではないのかという疑問も生じてくる。

第4に、技術革新の経済的メカニズムの問題がある。第6章では、ソ連の外国貿易と産業協力の歴史と現状に関して手際良く整理されているが、そこではソ連が革命後一貫して西側からの技術導入を行ってきたことが示されており、従ってソ連の経済発展がソ連型計画化方式だけでなく、先進資本主義国の技術開発能力にも大きく依存してきていることがわかる。だがもしも「ソ連社会主義」が内発的でダイナミックな技術開発能力をもつ経済メカニズムの確立に成功しないならば、より進歩的でより高度な経済的社会構成体であるべき社会主義は、衰退の運命をになったより低度の経済的社会構成体であるはずの資本主義の後塵を常に拝すというパラドックスから、脱出することが出来ないことになる。著者にとっては、資本主義に対する社会主義の本来的優位性をソ連社会が明白に示すことが社会主義の成熟度を判定する重要な規準なのだから、そのような技術開発能力をもつ経済メカニズムの確立という点は、最重要問題の1つになるはずである。しかしながらこの点について論述されていることは、次の点に限られている。すなわち近年におけるソ連の西側からの技術導入は、ソ連自身がそれを供給できないからではなく、時間と研究開発資金を節約する課題が切実なためであり、また社会主義的生産様式にふさわしい技術体系を整備する課題に取り組んでおり資金と研究開発能力を可能なかぎりこれに集中することを要請されているためであって、ソ連の技術開発能力の低さのせいではないという見解がそれである(239~240頁)。この見解は実証のないまま展開されているが、「ソ連社会主義」が「成熟・発達した社会主義」にさしかかろうとしている」というようなダイナミズムを持っていることを論証しようとするのであれば、ソ連における技術革新の経済メカニズムの現状分析を通じて、その確立を実証することこそが必要であったと思われる。

第5に、「『対立物の統一』的アスペクトからの総合的アプローチ」による「ソ連社会主義の現状分析」とは、どういうことなのかという疑問も生じる。1例をあげると、第4章では、「30年代初頭のソ連における失業の一扫は、社会主義に固有な完全就業を現実のものとした点で歴史的な意義をもつ出来事であった」(138頁)と主張されている。ここではソ連における完全就業が、「社会主義に固有な」ものとして、「ソ連社会主義の積極性(長所、功績)」として評価されているとみにしても、支障ないで

あろう。だが統計数字上の「社会主義的完全就業」が、30年代初頭以来、政治的失業者の強制収容所や精神病院への収容、「富農」の強制移住、国内パスポート制によるコルホーズ農民の土地への緊縛などに、多年にわたって依存してきたことが、近年ではかなり明らかになりつつある。従って一見すると社会主義的長所と思われるような現象が、実際には前近代的ともいえる非社会主義的な社会・経済的内容を包含しているような場合も存在することがわかる。このことから明らかになるのは、「ソ連社会主義を消極性(欠陥、誤り)と積極性(長所、功績)との統一においてとらえる」ということは、単に前者に対して後者と思われるものを対置することにあるのではなく、むしろ両者の相互依存と相互滲透の観点から現状を分析し、実態を正確に把握することにある、という点である。本書では、「ソ連社会主義」の「消極性」に「積極性」を対置する立場にとどまる傾向がみられ、「ソ連社会主義の現状分析」がその実態把握にまで必ずしも到達していないように思われるのは惜まれる点である。また第7章で労働時間に関する規範的制度が紹介され、それが厳格に遵守されていると述べられているが(252頁)、第4章で指摘されている期末の突貫作業にともなう時間外労働(152頁)にも示唆されるような、制度と実態との乖離を解明しようと試みた研究も既に存在している以上、現状分析が単に制度紹介にとどまり、実態分析に至らない場合には、現状分析の有効性が問われることになるだろう。

以上から明らかなように、序文で総括的に与えられている結論命題の本書における論証には、根本的欠陥が伏在しており、そのためにこの命題は十分な説得力を持ちえない、と私には思われる。

しかしこのような論証の不十分性を別とすれば、ソ連社会の現状分析によるその実態の正確かつトータルな把握を、共同研究によって推進しようとする試みは、きわめて貴重なものであり、本書はそのような先駆的試みの成果であるといえよう。また各章のテーマのもとに展開されている議論には学ぶべきことが多々あることも、強調しておきたい点である。

〔西村可明〕